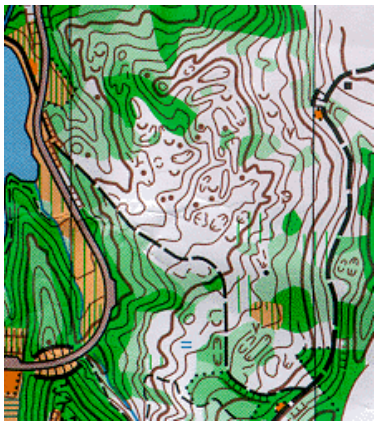
全日本リレー

埼玉団体初優勝、神奈川は３連覇逃す！

全日本リレーも今年で９回目となった。石川県での試行大会を含めれば１０回目。北陸での開催、競技者登録が初年度であることによるチーム編成上の困難などの原因が複合し、参加者こそ４００人と寂しい大会であったが、総合３連覇の神奈川を埼玉が破り、悲願の総合優勝を遂げるなど、戦いの内容は濃いものであった。

テレインは、東日本のリメークである。当時の地図を見ると一面緑の藪で、正直テレインには期待が持たれなかったが、実際に走ってみると、城跡や公園の微地形あり、大きな尾根沢をしのぐルートチョイスありと、技術的にも十分楽しめるレースであった。特にコースの短い女子選手権やジュニアは、難度の高い部分がコンパクトにまとまり、やや難しすぎるほどだった。

前半部から気の抜けないレッグが続く



男子選手権で使われた城跡の微地形エリア

レース結果には、今年初年度となった登録制度の影響が顕所に見られる。昨年の千葉のエース松沢は、東京に移籍。東京の男子選手権が世界選手権現役選手３人からなる「ドリームチーム」となる。また、これまで埼玉の選手権を走っていた小河原、東京のベテランであった高橋厚が神奈川の代表となるなど、選手の方としても戸惑いが見られたのではないだろうか。

選手権は男子（東京）、女子（埼玉）が貫禄勝ち

男子選手権は、大本命の東京の一走菅原が千葉の山口とともに帰ってきた後は、２走松沢の個人別２位に相当するタイムでしっかり後続を振り切る。その後も加賀屋と鹿島田で差を広げ、圧倒的なタイム差で優勝を遂げた。監督のオーダー提出ミスでエース山口が一走を勤め、１位で帰ってきた千葉は、その後も柿並、石井と堅実に順位をキープ、小林が福島に抜かれたものの、過去最高の４位となった。

特筆すべきは福島の活躍である。高橋（筑波）、紺野（早稲田）と二人の学生トップを擁する福島は、２走安田が穴と見られていた。予想通り安田は前半苦戦を強いられたが、後半静岡の村越とバンチングし、５位をキープ、高橋と紺野による２位上昇への布石を作った。３人が大学選手とは言え、首都圏以外の県が上位に入賞することは全日本リレーの発展のためにも望ましい。神奈川４走の山本は４分差を守れず３位に後退。神奈川の３連覇ならずの一因となってしまった。

女子は二人の世界選手権代表選手を擁し、高野をシニアに上げる余裕を見せる埼玉が、１走山本の快走でトップに立ち、その後をエースの田島とつないだ。千葉の１走赤石も、やはりオーダー提出ミスにより「もっとも走りたくない走順」ながらも秒差で２位につける。その後も宮本がくいさがり、２走終了段階では２分差につけていた。埼玉の３走三好は、本人のコメントにもあるように、決してできのよいレースではなかったが、地力で勝る小林に６分の差をつけ、優勝を確実なものにした。最後は、金子が逃げ切り連覇を遂げ、４分後に千葉が、これも過去最高順位で２位に入った。

女子選手権上位争いで注目されたのは、総合優勝に影響する３，４位争いである。５分前にスタートした京都４走高木が、神奈川の志村に逆転を許せば神奈川が埼玉と同点優勝、逆転されなければ埼玉の単独優勝という状況であった。最終コントロール脇には神奈川のチームメイトと埼玉の選手が陣取り、二人の帰還を待っていたが、結果は高木が逃げ切り、神奈川の３連覇が阻止された。

５位には愛知。１走森で出遅れたものの、落合が４９分の個人別ぶっちぎりタイムで４位に上昇、３走羽柴で若干後退したものの、最後は伊藤が追い上げ５位となった。６位は二人の加藤（貴子、真理）、今期学生ナンバー１の塩田、ベテラン木植を擁する茨城であった。

１走の深沢が骨折負傷で途中棄権した東京は、残り３選手がウムスタートとなる。ウムスタートした金並、渡辺円香、志村直子は、軒並み５０分台の好タイムで、合計タイムで計算すれば楽々優勝のタイムであった。

シニアクラスでは、男子は東京が山本賀彦、鈴木雄輔、竹内藤雄という往年のエリートランナーを擁し橋本らの兵庫をかわす。女子ではやはり東京が草野、宇野、竹内という厚い選手層で、埼玉高野の５分の追い上げにも関わらず１５分差で圧勝した。シニア両クラスを制した東京は、女子選手権が完走できていれば優勝もねらえただけに深沢のアクシデントが残念であった。

ジュニアクラス男子では、優勝は海老、狐塚、針谷の埼玉。また今福、大竹、鈴木健一郎の新潟も首都圏の大学を抑えての２位で健闘と言える。ちなみに埼玉の１走海老と、５位入賞の神奈川１走の山田はともに高校生で、いずれも個人別タイムでは３，４位に相当する好タイムである。今後の活躍が期待される。

ジュニアクラス女子は、番場の率いる京都が２位神奈川に３０分以上の差をつけて圧勝。番場も個人別タイムでも５２分と圧倒的なトップで、貫禄を見せた。女子ジュニアはまだまだチーム間のタイム差が大きい。逆にいえばチャンスも多い。選手諸君の精進に期待したい。

最後に男子ベテランである。このクラスでは、往年のエリート小笠原と海老沢の埼玉が、鈴木英、高橋厚、尾上秀を擁する神奈川を３分差で抑えた。その後も１０分以内に、３位千葉、４位愛知が入るなど、白熱したレースとなった。

選手権優勝チームのコメント

男子選手権優勝東京チーム
２走　松澤俊行

私は、結構執念深い。今回の走順が決まった時、「自分が大学４年の時の東北大のオーダーに似ている」と思った。その時、私を含む大本命の東北大は敗北を喫し、「オーダーミス」を敗因とする声も聞かれた。

「自分たちが間違っていなかったことを証明したい・・・」。そう思い続けていた。そして今回そのチャンスが訪れたように思われた。もっとも、こんな考えは青臭いロマンチシズムに過ぎなかった。レースが近づくにつれ段々そのことが分かってきた。そもそも、今回の４人は、これまでの全日本リレーの歴史の中でも最も力強い４人組である。過去の学生と比べても仕方がない。結局、全く新しい気持ちで当日を迎えることとなった。

本命と言われて勝つ。第三者から見て意義がうすいと思われがちなことも、当事者にとっては競技観に深みを加える大切な経験だ。そのことが認識された嬉しい勝利だった。

１走　菅原琢

「何がどうなってもまぁ、優勝でしょう」と日本中が思っていたに違いありません。「TAKUが大爆発でもしない限り……」という僅かな他県の希望と、監督の不安の芽を摘む走りに徹すれば、私は役割を果たしたことになります。主催大会の準備に忙しくトレーニングも満足にできない状況で、おまけに風邪気味という決してベストとは言えない準備状況でした。でも、私に続く３人は全員世界選手権の代表選手です。リラックスしてスタートラインに立てました。

あわてることはない、スタートまでの誘導もゆっくり走れました。（単に全然走れていなかっただけ、と言う話もある）後ろから数えた方が早いくらいの順位でスタートフラッグに到達。リレーの１番はとにかく大切ということで慎重にことをすすめました。　長い道走り、山口選手との走力差は歴然としていて、彼は私の視界から消えました。ついて行けそうなスピードなのに置いていかれる……（後日談：実は彼は絶不調だったとのこと。）城跡の微地形エリア、慎重にやったのに少々ロス。すぐにリロケートして後を追います。このショートレッグで小河原選手に追いつかれますが、彼はここでロストしたようです。これで１人旅となりました。マイペース、マイペース。周囲に人の気配はありません。と思ったら山口選手がアタックミスしたため？また私の目の前に現れました。そしてまた道走りで消えていきました。

終盤のポイントは「風の城」直下のコントロールの処理ですが、ここで迂回した私の後ろから山口選手現れる！　そして、また道走りで離され、フィニッシュ。他県の希望をうち砕く、トップと秒差の２位でした。

女子選手権クラス優勝　埼玉県チーム

１走　山本康世

とりあえず、足を引っ張らないでよかったー。金メダルのおまけ付きだったし、得した
た気がします。

２走　田島利佳

大エース高野由紀がシニアに回り繰り上げ代表としての出場だったため、彼女の代わりが務まるかどうか、彼女がいないからといって優勝できないのはいやだと、正直、とても不安だった。ふたを開けてみれば、ライバルと見ていた東京の棄権、難しいコース設定などから助けられのもあったが、それでも４人がそれぞれの走順で役割を果たすべくきっちりタイムをまとめたので優勝できたのだと思う。素直に喜びたい。

次回は女子で３連覇した県があるかどうかはしらないが、それをいい動機付けにして日々のトレーニングに励みたいと思う。

３走　三好のぶ子

優勝して当然、のプレッシャーは確かにあった。朝、自分の緊張を実感することもできた。しかし、東京都棄権、の報によりその緊張感はすっかり緩んでしまっていた。１走の山本さんのコメントからは、特に難しいとかトリッキーだとかいう印象は受けなかった。現在トップにつけているし、東京はいなくなったし、こりゃ楽勝だな、そんな気持ちでタッチを受け、スタートに向かう途中、千葉の２走が視界に入った。「あれ、意外と差がないじゃん」「難しくも何ともない」コースだったはずなのに、１，２番と立て続けにミスをした。どちらも先に隣接を見てしまうという、かなりひどいミス。少し後ろが気になった。その後も同程度のミスを２回、小さなミスを数回犯した。「なんて遅いんだろう」と、ミスしたりもたもたする自分に何度もいらいらした。それでも、追いつかれるほどの「ドッカーン！」はやってないぞ、と自分に言い聞かせて、なんとか走りきった。４走にタッチして、初めて時計を見た。５７分。遅いけど、思ったほどではない。体感時間（？）では、６５分くらいかかったような気がしていたのだけれど。とりあえず、これで優勝は大丈夫だろう、と思った。

１走で棄権となった東京の残りのメンバーは、ウムスタートで一斉に走った。３人がゴールした後、「これで１走が普通に帰ってきていたら、合計タイムで私たちの勝ち」と言っているのを聞いて、内心ヒヤリとした。そう、東京があんなことになっていなければ、私はもっとプレッシャーのかかった状態でスタートしなければならなかったし、ミスをした段階でもっと追いつめられていただろう。とっても楽ちんな状態で走らせてもらったから、ミスをしても大して焦らずにすんだのだ。何はともあれ、私たちは前評判通りに優勝した。チームの優勝はもちろん、総合優勝できたことは本当にうれしい。

しかし、自分のレースとしては最悪だった。思えば全日本リレーにおいて、自分自身納得の走りができたのは、１走を走ったはじめの２回くらいで、以後いいレースはしていないのではないか、という気がする。今度（があるのなら）こそ、「私のおかげで優勝できたんだ」くらい言えちゃうような、走りがしてみたいものだ。

第９回全日本リレー選手権都道府県別総合得点と順位

	ME	WE	MS	WS	MJ	WJ	MV	得点	順位
埼玉	6	12	4	5	6		6	30	1
神奈川	10	9	3		2	5	5	29	2
千葉	9	11			3		4	27	3
東京	12		6	6			1	24	4
愛知	8	8		3			3	22	5
京都	2	10		1	6			19	6

４走　金子恵美

大学１年生のときから埼玉県チームと関わっているので、今回の総合優勝には満足しています。埼玉県のWEで走るのは今回で２年ぶり(セレクションで落選や脚の不安で回避などで)２度目でしたが、２年分貯めておいたパワーをようやく使うことができたという意味でも満足しています。緊張をため込む質なので４走は嫌だと言い続けていたのですが、これからの経験のためにもということで本番１週間前に４走を走ることを決めました。三好さん、利佳ちゃん、ヤッちゃんと気心の知れたメンバーだったので安心していられるということも大きかったです。当日は走る前に騒いでエネルギーを発散するのを恐れておとなしくしていたのですが、走り出した直後の開放感とひたすら後ろを気にしながら走るスリルに「これがアンカーというものか」と感動したりもして、本当にいい経験になりました。つくづく今回走れてよかったなあと思います。監督の清水さん、団長の船橋さん、埼玉のみなさん、どうもありがとうございました。

来年もまたやりましょうね!!

全日本リレー大会参加記　　木村佳司

私には毎年楽しみにしている大会がいくつかありますが、全日本リレー大会もその中の一つとなっています。多くの社会人オリエンティアにとって最大のリレーイベントというと夏から秋にかけてのクラブカップ７人リレーというのが一般的なのだけれど、私の場合はなぜかクラブカップは走った回数より運営している回数のほうがはるかに多いのです。

またこの大会は長野県チームが学生から社会人までが選手団を組み、前日から泊りがけで参加するため、いろんな世代の人たちとお話が出来て、とっても楽しいです。必ず毎年新しい参加者がいて、人の輪が広がる感じがします。

全日本リレーが始まる前から、電子メールなどを通じて色々打ち合わせをして、大会前日に富山の宿所に集結しました。もちろん初めて見る顔もいます。長野県は南北に長いため、富山に入るルートも、新潟経由、北アルプス経由、岐阜経由などさまざまです。

私の場合は学生を松本でピックアップした後、北アルプスをトンネルで越えて、新穂高温泉の大露天風呂を経由して、頭から湯気を出しながら開会式会場入りをしました。

宿所に長野県メンバーが集まってきたところでジョギングに行こうという話しになり、たくさんのメンバーが参加しました。富山市街を流れる川に沿って富山城公園に入り、ワイワイとやかましいジョギングでした。そして夜のミーティングとなり、明日のコース予想をしたり、作戦を練ったりと気分は次第に盛り上がって行きます。

そして、レース。チームメイトの帰りを待ち、同じ長野県選手団メンバーに声援を送り、世代を越えたメンバーとともに楽しいレースを楽しみました。たかがレース一つなのですが、そこに至るまでの過程と、その世代を越えた一体感はまさに全日本リレーでしか味わえないものでした。

どこの世界でもそうですが、必ずジェネレーションギャップがあります。世代を越えての交流というのはあまりありません。しかし、全日本リレーでは同じ都道府県であるという「しばり」のおかげで他の世代の人たちと交流を持つことができます。こうしたチャンスを上手く活かせば、より楽しいオリエンテーリング生活を送ることがお互いにできるのではないかと思っています。いずれにしても「オリエンテーリングが好き！」という気持ちに変わりはないのですから。

さて、自分のレースの話をしましょう。長野県男子シニアの１走の私は、後続に確実に繋ぐことだけを考えて、いつも通りのレースを展開しました。想像していた通りの登りのきつさでした。森の通行可能度は思った以上に良く、充分満足のゆくレースができました。

長野県チームについていうと、男子選手権では昨年４位という大金星には到底及ばないもの順当な９位でした。女子選手権は時間内に完走できるかというハラハラした展開だったが、何とか時間内の最終フィニッシュで11位の順位をつけました。男子シニアも完走できたのでヨシとしましょう。

富山県の人たちの努力と地元の協力で創られた、とても楽しい全日本リレーに参加させていただくことができて、感謝しています。

私は個人的に富山県のメンバーを何人か知っているのですが、こうして運営者の顔を知っているというのはとても親近感が湧きますね。

中日東海ブロックオリエンテーリング大会

木村佳司

12月10日（日）中日東海ブロックオリエンテーリング大会が開催され、参加してきました。今回は小学校１年生の息子「トモヨシ君」と家族組に参加です。

今回の中日東海大会は浜松の中田島砂丘で行われると聞いていたいので、楽しみにしていました。ここは以前に観光で一度訪れたことがあり、すでにO-mapがあることも知っていたので、是非一度オリエンテーリングで走ってみたいと思っていました。

山国の信州に住みながら私は海浜系テレインが好きなのです。しかも、今回は浜松OLCの島崎がマッパーということもあって、是非参加してみたい大会の一つとなっていました。 余談ですが、2000年のクラブカップ７人リレーはRMOサービスの山川一家と木村と島崎で殆どの事前作業を行ったといういきさつがあります。

前日は、やっと小学生になったトモヨシ君を連れて、初めてユースホステルに泊まりました。初めての二段ベッドに大喜びしたトモヨシ君は、ジャングルジムのように登ったり降りたりを繰り返していました。「今回の旅行で一番楽しかったのはなーに？」「二段ベッドだよ。」「その次に楽しかったのは？」「オリエンテーリング。」　だって。

さて、会場は広大な公園の一角。駐車場も充分な広さがあります。地方の大会は車でいくとアクセスがすごく楽です。子連れで参加するにはこうした点は見逃せません。中田島は大凧上げで有名な場所で、公園でも多くの人が凧上げを楽しんでいました。

さて「すっぽんコース」に参加するお母さんを残して、すぐに家族コースに参加します。 スタート直後、トモヨシ君は殆ど地図も見ないのにコントロールの匂いのする方向に犬コロのように走って行きます。これでなぜかちゃんと１番コントロールに到着してしまうところが不思議。そのあと森を抜けて大砂丘を横切り、また森を抜けてゆきます。3.5kmのコースなのですが、目の前に獲物があると疲れた様子もなく次々とこなしてゆきます。実に楽しそうです。やっぱり海浜ということでアップダウンが少ないせいでしょうか。

今回の大会では個人クラスではSI社の電子パンチシステムが使われていました。しかし家族組は紙パンチ方式でした。共通コントロールには両方のパンチ機材が置いてありました。狭いテレインなので隣接コントロールをいくつか見かけるのですが、目の良いトモヨシ君はSIのパンチ台しか立っていないと判ると、コントロール記号も見ずに「違う」と判断していました。なかなかやるもんだな。

さて、のんびりとフィニッシュして、速報を見ていると、3位と7秒差の4位になったことが確定。競技している時はそんなに頑張った感じはありませんでしたが、7秒差というのはちょっと残念だったらしく、「もうちょっと頑張れば良かったんだよ。」などと後で言っていました。やっぱりどんなレベルの参加者にも速報は大切ですね。

レースの方はトップクラスでは5分/kmに手が届きそうなハイスピードでスリリングなレース展開となったようです。ハイスピードのレースを制した勝者には地元産の賞品が贈られました。事前にコース名にちなんだ賞品が用意されていると聞いていたので、うなぎコースは「うなぎパイ」・・・これは想像できました。すっぽんコースでは「すっぽんパイ」・・・こんなのあるのかな？ うなぎパイの姉妹商品なのか、それともナマすっぽんが渡されるのか？ これを想像するのも楽しい大会でした。